



樹皮は厚いコルク質なのですが、これを削ると鮮やかな内樹皮が出てくることからキハダと名付けられました。葉を揉むと、ミカン科特有の独特の匂いがします。秋には美しく黄葉します。

花は初夏、枝先に黄緑色の小さな花をたくさんつけた円錐形の花が咲きます。雄雌異株で、雌株に出来る果実は、はじめは緑色で、柑橘系のいい香りがします。熟すと黄色～黒色に変化します。

キハダの黄色は「黄檗色（きはだいろ）」と呼ばれ、黄色の染料以外にも、赤や緑色の下染として利用されてきました。特に紅花染めの鮮やかな紅を引き立たせるには、キハダの下染が無くてはならない染料でした。キハダ染料の手法は中国大陸から渡来し、防虫効果もあるため、昔は長期間保存が必要な経典などに使う紙をキハダで染めて使用したそうです。

また、黄色い内樹皮を乾燥させたものは、生薬「黄柏（おうばく）」と呼び、古くから胃腸薬などの原料として使われてきました。奈良県吉野の有名な胃腸薬「陀羅尼助（だらにすけ）」の主原料にもなっています。

園内では、みずばしょう園や昭和の森などで見る事が出来ます。また、この時期見られる冬芽は、赤みがかった半球形で不思議な形です。葉の落ちた跡はよく見ると人の顔のように見えて楽しめます。



キハダの花 6月17日



果実 11月15日



冬芽 2月27日